

皆さんこんにちは。入局6年目の今村文香です。

今回は下記の学会に演題発表、及びスタッフ（写真撮影係）として参加しましたので、ご報告いたします。

第61回日本放射線腫瘍学会生物部会学術大会/第52回放射線による制癌シンポジウム

会期：2024年5月17日（金）～18日（土）

会場：群馬会館

世話人：高橋昭久 実行委員長：吉田由香里 プログラム委員：尾池貴洋、武者篤



群馬会館正面入口前

●生物部会、制癌シンポジウムとは

生物部会とは、一般放射線生物学、放射線障害、防護、保健物理など、主に基礎研究分野でのテーマを取り扱う学会です。元々、放射線物理に関する研究発表や情報交換を行う物理委員会（後の物理部会）が既に発足されていたため、「放射線生物研究の討議の場を設けた方が良いのでは」と放射線生物研究者らより働きかけがあり、1964年に創設されました。

一方で、日本の放射線基礎医学研究者と放射線臨床医との間にギャップが大きく、アメリカのように基礎研究者と臨床医との間のギャップを埋められないかという意見もあり、「基礎と臨床の対話出来るような会を造ろう」という流れで発足されたのが、1971年から開催された制癌シンポジウムです。初回開催時は生物部会とは別に開催されましたが、第6回制癌シンポジウム以降は生物部会と同時開催する運びとなり、現在に至ります。

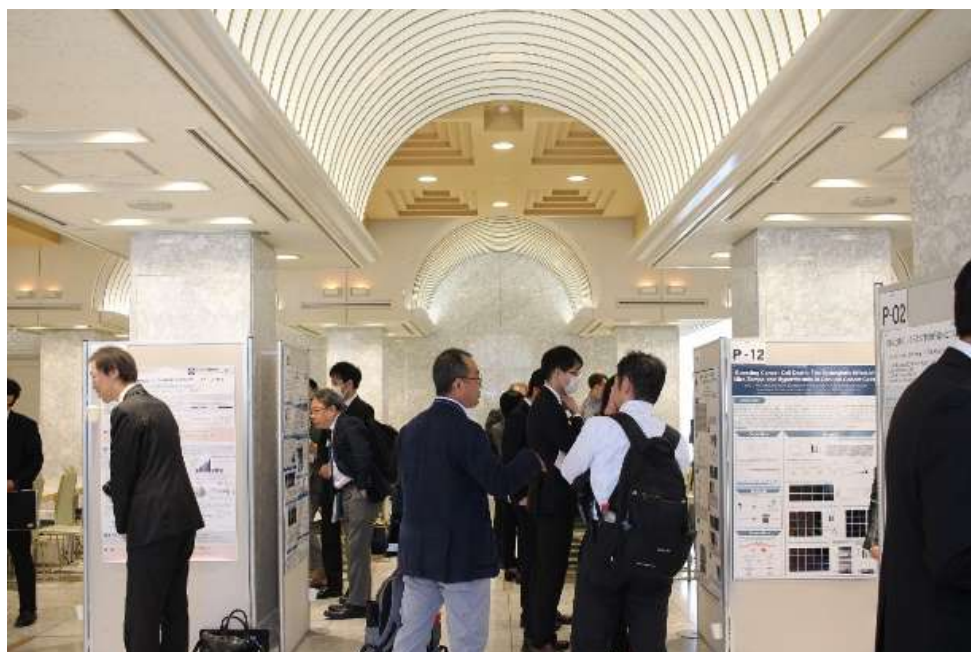
●学会当日の様子

学会は2日間に渡りハイブリット形式で開催されました。オンライン参加者はもちろん、現地参加者も多くの方が来場され、2日間盛況の中無事に学術大会を開催できました。

写真を一部掲載致しますので、今回参加されなかった方にも少しでも学会会場の雰囲気を感じていただければ幸いです。



一般口演会場（写真は開会挨拶）



ポスター発表会場

●生物部会／制癌シンポジウムのこれまでとこれから

今回は生物部会創設 60 周年の節目の年であり、京都大学名誉教授 小野 公二先生より「生物部会 60 周年のあゆみ」という題目で学会創設から現在に至るまでの歴史についてご講演されました。

研究テーマ	時代	
低酸素細胞増感剤	1970 年代後半～1990 年頃	臨床では実現せず
ハイパーサーミア（温熱療法）	1970 年代後半～1990 年代半ば	1990 年保険診療に結実
高 LET 放射線	1960 年代後半～	2016 年保険診療（炭素イオン線）に結実
PDLR 阻害薬	1980 年代～1990 年頃	基礎研究にて修了
感受性予測（放射線生物学的）	1980 年代～1990 年頃	臨床では定着せず
損傷の回復、DNA 修復	1960 年代～	
線量分割・回数	1960 年代～	1980 年代、LQ モデルの普及で臨床でも進展
放射線と免疫	1960 年代～	免疫チェックポイントの発見で、近年に飛躍
p53, アポトーシス	1990 年～	
癌と低酸素（HIF1）	1960 年前半～	
放射線と抗がん剤	2000 年頃～	セツキシマブ、イレッサ、ペバシズマブなど
ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）	1960 年代後半～	2020 年再発頭頸部癌で保険診療に結実
高線量率照射（FLASH）	2015 年頃～	

特別記念講演「生物部会 60 周年のあゆみ」より引用（一部加筆修正あり）

上記表より、免疫チェックポイント阻害薬、重粒子線治療（炭素イオン線）など、2024 年現在がん治療の選択肢として用いられる治療法は、いずれも半世紀前より先代達の研究成果の積み重ねを経て保険診療の承認を得たおかげであることが分かります。本学術大会でも複数演題発表がみられた BNCT や FLASH については現在着目されている研究分野であり、今後の研究成果次第では、もしかしたら将来新たな治療法として確立していくことになるかもしれません。

最後になりますが、特別記念講演 小野 公二先生 より、若手へ向けたメッセージが印象的でしたので、この言葉を以て締めたいと思います。

突き抜けよ、突き抜けよ、時代を突き抜けよ。

人知らず、人容れずして畏れるな。

追（つ）いてくる、追（つ）いてくる、

やがて時代が随（つ）いて来る。